書評

ベルランゲ河野紀子編『ヨーロッパにおける日本学の源流——リール市レオン・ド・ロニー文庫を巡って』

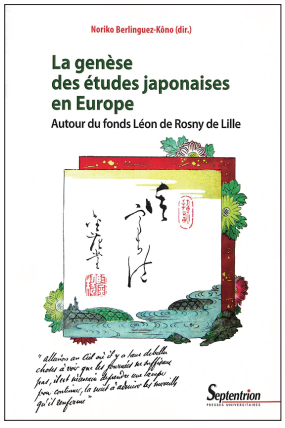
Noriko Berlinguez-Kôno, ed. *La genèse des études japonaises en Europe: Autour du fonds Léon de Rosny de Lille*

マティアス・ハイエク

レオン・ド・ロニー（一八三七—一九一四）は、日本人はおろか、一般のフランス人にさえ馴染みのない人物であるが、実はフランスの日本学の創始者として知られている。ロニーは僅か十五歳の時より、コレージュ・ド・フランスでスタニスラス・ジュリアンに師事して中国学の研究を始めたが、当初よりジュリアンに未開拓だった日本語を学ぶように勧められた。教科書も師匠もなく、ロニーは独学で日本語を学びはじめた。日本に行く機会もなく、資料も限られていた時代でロニーの日本語学習には限界があったが、それでも一八六二年の文久遣欧使節団の日本人とも、維新後の使節団の人物とも交流を持つことができた。その功績が買われたのか、一八六八年に東洋言語特別学校（現在の東洋言語文化大学、通称 INALCO の前身）の日本語教授に任命された。また、ロニーは若い頃より中国や日本にとどまらず、広く「外国の文化と言語」に興味をもち、南米のマヤ語やサンスクリットの研究も行った。さらに、現在でいう「研究のネットワーク構築」にも尽力しており、「民族誌学会」を発足させ、その部会として「アメリカ・東洋学会」を設立し、それを媒介に一八七三年世界初の国際東洋学会議を開催したという画期的な活動もあった。

ロニーの研究、特にリール市のロニー文庫の研究は、一九八〇—九〇年代の書誌学的な研究以降、二〇一〇年あたりまではしばらく停滞気味ではあったが、二〇一三年にロニーの子孫の発案によってリール市蔵のロニー関係資料をめぐる研究は再開した。

そこでリール大学教授のベルランゲ河野紀子はこのロニーの生涯とその作品の考察、またはリール市に寄贈されたロニー文庫の



Presses Universitaires du Septentrion, 2020

分析を通して、ヨーロッパの日本研究はどのような思想を背景にして創造されたか、また当時どのようにして東西の知識が交差していたかという問題について、新たな視点を提供しようとして本書を編集するに至った。

本書はベルランゲ河野による序章で始まり、同じ著者の跋文で締め括られている。十二章で構成されており、各章には一人の執筆者が当てられた。分担者はリール市の日本研究者のみならず、フランスやベルギーの日本史の専門家、あるいは言語学の研究者であり、ロニーの子孫までも含まれている。各章の概要は以下の通りである。

パトリック・ベルヴェールは「日本学分野におけるレオン・ド・ロニーの協力者ネットワーク全体像」において、ロニーが交流を持っていた日本人、日本在住のフランス人や広く「東洋学」に関係していた人物などを徹底的に調査し、明治時代の思想に多大な影響をもたらした福沢諭吉や、仏教思想を改新し、「宗教」概念の定義に関わった島地黙雷のほか、当時のフランスで日本語講師を務めていた今村和郎など、ロニーの様々な活動に大きく貢献した人物たちを紹介する。その人物の多くはロニーが立ち上げた学会に参加し、発表もしている。世紀末に近づけば近づくほど、日本人は少なくなるが、これらの学会がフランス、延いてはヨーロッパの日本研究の基盤を築き上げたことは、その錚々たる面々から容易に理解できる。

ベルランゲ河野紀子は「レオン・ド・ロニー文庫と十九世紀における知の交流」において二一〇点の和書と五一〇の漢籍からなるロニー文庫の中より、『約翰福音之傳』、『海国図志／亜米利加総記』、『婦嬰新説』の三点を取り上げ、どのようにロニーがそれぞれの書籍を入手し、またそれらはロニーの学問とどのように関わり合っていたかを検討した。三書はその入手の経緯、形状、そして話題も全く異なるが、どれも中国語訳を経由した外書の日本語訳であるという重要な共通点を持っている。これらの本が当時のヨーロッパに流布したのは日本からの使節団の派遣と関係しており、この状況がヨーロッパの東洋学の進展に大きく関わっていることを物語っている。

西澤直子は「レオン・ド・ロニーと福沢諭吉」で使節団の武士の一人、福沢諭吉に論点を絞り、ロニーとの交流を検討する。慶應義塾大学が所蔵する『ロニーアルバム』という資料を手がかりに、福沢のヨーロッパでの体験が、その思想の形成にどのように反映されているかについての考察である。一八六二年四月の出会いより、福沢とロニーは何度も会うことになり、同年の福沢の帰国の途中まで文通を続けた。現在からみれば短い滞在であったが、福沢はロニーの学会や雑誌に高い関心を示しており、帰国後の活

動にその経験を生かし、『西欧事情』を執筆した。「欧露巴の一奇人」、ロニーの存在は福沢に新しい思想の可能性を示したのかもしれない。

ギヨーム・カレは「在パリ「大君の隠密」東京大学史料編纂所所蔵ロニー書簡について」で、一八六九年以降に収集された日本にあるロニーの関係資料のうち、三点の手紙に注目する。この書簡は一八六六年と一八六七年にロニーから江戸幕府の「外務大臣」に宛てられたもので、その中身には当時のヨーロッパ事情の概要や政府への助言が含まれている。江戸幕府がどこまでこのロニーの助言を重視したかは定かではないが、幕府にとってこのような非公式のインフォーマントの存在は有意義であったはずであり、またロニー本人にとって日本政府との架け橋となることは、「日本の専門家」というフランスでの自分の地位を確保する一手段でもあった。カレが指摘するように、ロニーの書簡には薩摩のような藩が独断でヨーロッパに代表者を派遣するなど、維新の前触れととれる動きへの不審視が顕著で、維新前より日本に関心を持った学者の戸惑いと不安を物語っている。

ウィリー・F・ヴァンドゥワラは「フランス日本学とレオン・ド・ロニー――日本語学専門家としての貢献」でロニーがどのように日本語を学習したか、また彼の学問は初期の日本語学習にいかなる貢献があったかを検証した。ロニーが教科書として使っていたのはシーボルトによって伝わった『和漢音釈書言字考合類大節用集』（『書言字考』）という江戸中期の辞書であり、十七世紀の宣教師が作った初期の日本語文法教科書の縛りからのがれるのに重要な資料であった。ロニーは一八五八年にすでにその内容を学習者向けにフランス語で紹介・解説しており、そこで彼の中国語、サンスクリットについての知識が生かされている。また、日本語の知識を応用したロニーの著作で当時最も注目されたのは『詩歌撰葉』であるが、その中には『万葉集』、『百人一首』からの中古の名歌とともに、十八世紀初頭の百科全書、『和漢三才図会』から採った漢詩や、福沢諭吉や松木弘安（後の寺島宗則）などの日本人の短歌、さらに吉原などの遊郭の流行歌までも含まれており、十九世紀後半の日本の風俗を反映している面もある。ロニー自身の短歌も収録されており、この作品から本人の多様な関心とともに、その学問の限界もしばしば窺えるが、初期の日本語学習の基盤となったことに変わりはない。

岩下曜子は「レオン・ド・ロニー『養蚕新説（1868）』についての一考察」において、ロニーの別の著作に焦点を当てる。『養蚕新説』は当時のフランスの農務省の依頼を受けてロニーがフランス語に「翻訳」したが、原本の正体はまだはっきりしておらず、謎も多い。岩下は本書の成立において先駆するホフマンによる『養蚕秘録』の仏訳の役割を指摘している。また、女性しか描かれ

ていないロニーの本の挿絵と、同じ場面を描いた他の養蚕書との違いも取り上げられ、「ジャポニズム」が芽生える最中、当時のヨーロッパにおける「日本像」の形成との関係も吟味されている。

ところが、ブリジット・ルフェーヴルの「レオン・ド・ロニーが演劇を手掛ける時。1871『青竜寺』」では、ロニーが「ジャポニズム」に対して批判的であったことが鮮明に現れる。この『青竜寺』というのは一八七一年に上演されたロニー作の軽い喜劇で、「アテネ・オリエンタル会」の会員を中心に制作されたものである。「アテネ・オリエンタル会」はロニーが発足させた「民族誌学会」の支局的な集まりであったが、一八六四年に独立し、「東洋、とりわけアジア、アフリカ、オセアニアの諸民族についての知識」を「ヨーロッパとの関係を問わず」深めることを目的としていた。ロニーは既存の台本を仏訳したわけでもなく、見たことのない能や歌舞伎に影響を受けたわけでもない。その劇はあくまで会員の知識にアピールするように作られており、いわば仲間受けを狙った同人誌的なものである。しかしその中にロニーは日本語の歌、あるいは中国語の歌を導入し、彼による歌集にも収録されている和歌なども使われている。また、作風は同時代のフランス喜劇に準じているが、「学問」の賛美と、資本主義への批判、そして学問を伴わない、趣味的な「ジャポニズム」に対する非難も顕著である。ルフェーヴルが指摘するように、このようなマイナーな作品でも、ロニーは人間文化の普遍性を前提とした姿勢を貫いていたのである。

その姿勢はやがてロニーを日本学から遠ざけることにも繋がったと思われる。「レオン・ド・ロニーにおける仏教の受容――解説者から実践者へ 一個人の軌跡」でクリス・ベルアドはロニーと仏教の関係を軸に、ロニーの活動の別の側面に迫る。ロニーの仏教観、そして神道観の精密度は初期より一八九〇年代までは明らかに増すが、島地黙雷との交流で得た「哲学としての仏教」（近代仏教）と「民間仏教」という区別が徹底している。晩年のロニーは日本仏教よりもその「哲学としての仏教」に関心を持ち、「東洋の宗教」について講義を始めた後、ついに仏教の「経行」（歩く瞑想）に因んだ「哲学散歩」を推進した。さらに一八九一年に実証主義と仏教とキリスト教を融合させた「折衷仏教学派」を創立させ、以降ヨーロッパへの仏教の導入に努めたようである。

このようにロニーは日本の文化のみならず、広く「東洋」の文化、あるいはさらに視野を広げて当時のヨーロッパに「異文化」を認識させるために努力を続けた。言語学者のフィリップ・ロットシュテンは「レオン・ド・ロニー、「日本の心」の伝播者――知の受容の大いなる賭け」でロニーの活動を様々な観点から再考して、彼の「東洋文化」の紹介の思想的背景を描いてみせた。

最後に、ロニーの子孫でもあるベネディクト・ファーブル＝

ミュレールは「レオン・ド・ロニー、その幅広い人脈――東洋からアメリカへ」で、祖先の活動を総括し、その再評価の基盤となる功績をまとめた。それにより日本学の創始者という側面よりも、十九世紀の世界の東西に研究仲間の網を作り、情報交換のネットワークを整備しようとした先駆者の輪郭が浮き彫りになった。

以上、煩雑ながら本書の内容の要点をまとめてみたが、多才な学者、ロニーの性格に合わせたかのように、実に多彩な論考である。どの章も丁寧な資料の紹介と分析に基づいており、本書によってロニーの功績はもちろん、当時の日本学の推進を可能とした世界状況、思想的背景の理解も有意義に深められたように思う。一次資料の写真も豊富で、ロニーの蔵書や書簡などの実感を得ることができる。誤字は通常の範囲を出ておらず、読書を妨げることはない。ただ、本書はロニー文庫とロニー関係の資料をほんの一部しか紹介しておらず、例えばベルアドが指摘するように、ロニーの仏教関係の資料にはまだ十分研究の余地が残っている。本書に倣い、これからヨーロッパの東洋学者の蔵書を使った研究が引き続き進められていくように願う次第である。[1]

注

(1) 実際、ロニー文庫の漢籍に関して、町泉寿郎を筆頭に二松学舎大学の研究者たちが数年前から調査研究に取り組んでいる。その漢籍の蔵書の分析からまたロニー本人だけではなく、十九世紀ヨーロッパの「東洋学」の有り様が一層鮮明に現れてくると期待できるであろう。